

# 公立高校の再編問題と幕別高校の支援策について



6月3日、道教委から9年度～11年度の公立高校配置計画案が公表された。当初、道教委は4月に開いた公立高校再編計画の「地域別検討協議会」で11年度には中卒者数156人の減が見込まれることから、三条、柏葉の各1学級減に加え、管内の全日制高校の学級数を「2～3学級」減らすとしていたが、今回は学級減とする学校の特定が困難として見送られた。

道教委は各学校の今後の推移を見守りつつ状況（定員割れ）によっては再編の動きを加速させる可能性が大きいと言われる。以下、3点について伺う。

①今春の応募者数の内訳・分析と、公立高配置計画をどのように受け止めているか。

②幕別高校が毎年定員割れにある実態を克服するためには、魅力ある高校づくり

や特色ある高校づくりを地域あげて共通認識で取り組むことが重要である。具体的にどのような手立てを講じていこうと考えているか。

③今春、管内の小規模校は志願者が軒並み前年を上回ったが、これは小規模校を抱える町が存続をかけて様々な支援策を打ち出しており、それが広く周知をされたためともいわれている。

また、道教委は町のそうした熱意に極めて強い関心を寄せているとも、こうかんとささやかれている。町として幕別高校存続に向け、どのような施策や支援策を思い描いているか。

## 町長

①平成20年度の入学状況は、定員80名に対し、当日の出願者数は73名、倍率は0.9倍となった。

最終的な入学者は、町内33名、帯広市30名のほか、芽室、池田、浦幌からも生徒を迎え、新1年生は69名

となり、欠員は11名である。本年度の幕別高校入学者のうち、幕別町内からの入学者は入学者全体の49%を占め、前年度の29%と比較すると、地元からの進学率が格段に上昇したが、道教委が示す「地元進学率」は、町全体の中学卒業生数のうち何人が地元の高校へ進学したかという計算方法のため、本町の場合は11.5%の地元進学率となる。

今回公表された配置計画案では、十勝管内では、新たな学級減は見送られたが、「公立高等学校配置計画の策定後、急激な中卒者の増減や生徒の進路動向に大きな変動が生じた場合など、通学区域における中卒者の進路動向を見極めて、毎年度再検討を行う」と明記されており、道教委の考え方そのものに変更がない限り、幕別高校の学級減や募集停止が懸念される。

②学校や幕別高校教育振興会をはじめ、関係者の努力が実を結び、欠員数は年々減少しているが、いまだ欠員が解消されていない事実には重く受け止め、生徒から見て「行きたい学校」、保護者にとって「行かせたい学校」とするため、今後も多くの方々に協力いただき、魅力ある、特色ある幕別高校を目指すことが大変重要と認識している。

平成18年度から「魅力的な幕別高校をめざすための懇談会」を開催し、幕別高校教育振興会や同窓会、PTAのほか、経済団体も集まり、支援や提言をいただいている。

高校の再編問題は、限られた時間の中で、一定の成果を生み出すことが求められ、早急に本懇談会に図り、魅力ある・特色ある幕別高校についての議論を進めた

い。③本町は、帯広をはじめ周辺に多くの高校があり、多様な進路選択ができる中、我が町に高校が二つ存在していることは、大変大きな魅力と思っている。

江陵高校が私立高校としての存続を模索する中、生徒の将来を考え、社会情勢の一步先を読み、不断の経営努力を続けてこられたことは、今後の幕別高校のあ

るべき姿として大きなヒントにもなると思う。

管内の自治体では、募集活動、教育活動、部活動などに対する支援策を講じている事例もあり、これら支援策が入学者の増加に結びついていると聞く。

幕別高校においても、これまで文部科学省の「豊かな体験活動推進事業」や経営改善に取組み、目に見えるかたちで徐々に改革が進められているが、何より高校自身が変わろうとする熱意が大事であると考えている。

